

橋爪大三郎著 『ふしぎなキリスト教』 恐るるに足らず

森 下 龍 淨

■ おもしろい本

この本、わかりやすい、面白い、売れている。が、キリスト教の強大さに圧倒されてばかりはいられない。ここは一つ猪突精神で真正仏教徒から一言あつてしかるべし。一神教と多神教の分け方とか。仏教もその多神教に全部ほりこむとか十把ひとからげのまとめかたも、世間の通俗理解とはいえ乱暴すぎる。

まずは書き方だが、「……かな？」といった言い回しで主張してほしかった。失礼だが橋爪とて神学者ならぬ身。なのにこんなにも断定的に歯切れ良く書き進めていいものか。「玉に瑕」というが、本家キリスト教サイドのコメント絶無はキズを注視してのことなのか。社会学者としての理解の限界とくればどうしても他の書物にも目を通さざるを得ない。この本とそれらをあわせ読むことによって更に見えてきたことがあり、それよりなによりその逆照射で浮かび上がる日蓮宗の今と法華経。大澤真幸のツッコミで仕上がった本だが、この本を本宗へのツッコミと受け止めては如何。法華経が鏡なら、この書も法華経を照らし出す鏡。大いに触発されたところか、これに見る限りキリスト教は宗教なのかそれとも意外や意外、法華経に肉薄していると見るのか実に悩ましい。それにしても遠藤周作の「沈黙」をバージョンアップした書物が出ないものか。

■ もし『不思議な日蓮宗』だったら

空想してみる。二匹目のドジョウをねらって同じようなバージョンで「不思議な日蓮宗」という本が出たらどうだろう。気鋭の論客二人を用意しよう。ツツコミの一人は村上龍でもいいし立花隆でもいいし高橋源一郎でもいい。受け手は末木文美士の弟子あたりか。しかも敏腕編集者が本宗檀家だった場合、こんな切り出しになるかも。

— 神・釈迦・日蓮で三位一体ですかね

— 水子供養が流行っているようですが、大人霊とは扱いが違うということですか

— 法華経と言えば日蓮宗。日蓮宗と言えば荒行ですよね。あの中に唯一の秘儀があるというわけですか。寒中に水をかぶったりしての過酷な修行でしょう。ただ単に気合を入れているだけの体力作りとは思えない。ま、霊力を備えるため僧侶としてハクをつけるための先行投資ですか

「修行の出发点からして檀家の資力（布施）に助けられ、輿望に押されて修行門をくぐるわけですから、まずは檀家の家内安全・身体健全を必死に祈るわけですよ、仏菩薩神々を総動員して。本来宗教とは心の救済でしょ。しかし学出たての二十四五歳の僧侶をですよ、七十八十の老婆がですよあたかも聖者の如くに崇める。本人もその気になる。そのように振る舞う。もともと仏道の修行とは『くり返し身につける』が原語の意味です、どこでどう変容したのでしょうかね。勿論法華経が日蓮宗の基礎です。不思議な日蓮宗というタイトルにしたのもその辺にあるんですよ。」

— 魔除けのお札といいますがキリスト教の免罪符と似ていますよね

— 弥勒さんにしても菩薩ですよ。なのに日蓮さんは大菩薩といえますな。日蓮宗に違和感はないんですかな

— 救済主といったら阿弥陀さんでしょう。なのに日蓮宗の方では阿弥陀さんのアの字も言わん。なのにヒゲもじやの、如何にも苦行を成就しましたが売りの超若手僧侶を救済者の列に置く。不思議な世界ですな

— お盆のお経・命日経・永代経、いっぱいありますね

——依代というのがいますね。キリスト教の預言者と似ていますよね
などと続くのだろうか。

売らんかなの企画であったとして、僧侶以外からの視点も新鮮だし世間の注意は引く。仏教理解にはいくらか寄与しよう。しかし我々には違和感多々。生かじりの上、世間の俗的理解に寄り添いすぎ。ベストセラーにでもなったら法華経・日蓮宗の流布に吉と出るか凶と出るか。ともかく「日蓮宗版」の妄想を掻きたてられたことは確か。

■ 提婆品の海中教化 ノアの洪水

法華経から見るとどうなるか。

紀元前四千年頃のノアの洪水をもちやんと記述しているとあちらさんは胸を張るだろうが、こちら法華経提婆品には海中生活時代（お猿さんとの分化をさかのぼること遙か昔）の「教化の記述」もあり、創造主よりはるか久遠をカバールしているものと拝している。ここにも法華経の優位が歴然として見えていいだろうし、キリスト教の限界とそれに続くムリの積み重ねが見て取れるように思う。

■ 神話のムリ 黙示録へ

どうやら神話と歴史的事実とイエス・キリストのつぶやきとして伝えられたことの総体だという。それがないまぜになったものを信じるべしという。「強制」ではないか聖書は。この世は、出自が明らかでなく圧倒的な超越性そのものといってもいいほどの天の神様による創造だと。そこをそこ信じるのがスタートにしてゴールだと。しかも神と人との距離は絶対には縮まらないと。いいながら最重要の場面では聖書の上に手を置く奇矯。不敬としか見えぬ仕草。どうにもこうにもムリがある。だから宣教師を必要とする。

我々は頭頂に経本を礼敬する。そのようにしてまで礼敬するお経とは、人間に超絶した創造主どころか人間釈尊から出たとしか言いようのない、たどりついた教えである。距離の近さと信徒の深さからそうするのであつてちつともムリがない。

あちらのムリはまだある。「だまつてついてこい」を延々と続け、最後は黙示録だと。地上最強の宣教師の強烈な布教なくして誰がついて行こう。彼の人達の付き従って行く様は我々にはとうてい信じられない。我には高原に於ける湿土泥土の喩えがある。水そのものはまだ見えないが「まもなく」の期待にどれだけ勇気づけられよう。これ、伴走者の本領ではないか。法華経でよかった。

■ アダムと地涌菩薩の符合 「善男子」と「おまえら」

今ひとつのムリがアダムとイヴのネガティブな説明。なんでこうも罪、罪、罪。おまえらは罪深き者共よなどと。ましてやアダムはアダーモ（土）から出た人というのが元意らしい。これ我々言うところの「地涌の菩薩」そのものではないか。その皆が皆仏菩薩と直結だ。その距離たるや竹膜ほどの僅少だと。暴論だと非難されるのを恐れずに言えば、あえて宣教師を必要としない仏教といえる。なぜならば千万億の「地涌の菩薩」がおわしまして宣教の任に当たってくださったっている。ま、他宗派を考慮すればこれは法華経のみに限ることか。

その上、これでもかこれでもかとネガティブの網にからめとるあの呼びかけ、「おまえら」だ。全知全能と措定するからこういうことになる。「愚民扱い」という言葉が頭をよぎる。法然・親鸞らはまだこれよりは救われる。自らを含めて「罪業深重」と認識するのだから。片やキリスト教、空前絶後の超越性に塗り固められた神様ならばさもあらんと思うが、わが法華経の呼びかけ方「善男子善女人」との気の遠くなるような距離。ああ、法華経でよかった、これしかないよと仏様に感謝することしきり。わが法華系はだから最尊最上、という高揚感にも包まれる。それを教

えてくれたこの本はやはり逆照射の光源として輝く。

■ ニーチェ そして カミ

たった一人でニーチェが、天国行き切符という幻想に狂喜する善良な人へ、狂気というターボをかけてまで覚醒を促し、「力への意志」を著したのと、それまでの仏教に飽き足らない仏教徒の、大乘仏教徒の法華経産出とはどこかできつと通じていよう。今やニーチェ抜きにキリスト教を語れないが、「抜き」にしても世界の宗教という宗教は地下水脈のレベルでは「完全に」繋がっていて「ほんとうはいっしょ」だと見るのが正しいのではあるまいか。違いは、先を行くか後に続くかの差。この視点で橋爪・大澤とキリスト教に迫れば、泉下のニーチェも大喜びだろう。

そこで「実は一緒に繋がっている」の深奥部へ多方面から迫っていくためには、「聖」とか「神」とか「仏」を、世界の趨勢となりつつあるかに見える「カミ」という片仮名表記で統一してはどうかという姿勢、これを支持したい。聖なるものを表す語として異論はなからうと思うが。

■ キリスト教は遅れているか

突出して異教を排斥してきた歴史を持つが、やつと諸宗教対話に踏み出したキリスト教。その「対話」をもう一歩すすめて、ぜひとも法華経の門をたたいてほしい。まさにその時、悪逆と福音の混合物・毒饅頭を大善意で配り歩いたザ宣教師・ザビエルも「目からウロコが……」と叫ぶはず。彼にそのエネルギーを付与できるのは「今のキリスト教団」であろう。躊躇するほどには臆病ではないと信じたい。

しかし、「天動説・地動説」への対応といい、ニーチェの受容といい、この教団は頑固。(キリスト教に思いを寄せる)世間はずっと先を行っている。

当方も生かじりだがと断った上で発言させてもらえば、キリスト教も遅れているという感想を持っていたが、意外やすぐ後ろに迫っているのかもしれない。キリスト教よあと一歩だ。惜しい。法華経の眼差しを借りた時、そう言える。

見てきたように、愚民扱いするキリスト教。従う大衆という図式。大衆を見下しつつ天の神に讃美歌を捧げる。これではトイレの張り紙にも叶わないではないか。そこには、こんなすばらしい文言が。

『お客様の協力により清潔が保たれています。ありがとうございます』と。

人間の可能性に最大の信を置かない宗教がアロウカ。人間の可能性をこそ讃美しないでどうする。法華経こそ讃美歌の極北に位置づけられるべし、だ。各位の叱正をお願いしたい。